悪性線維性組織球腫

悪性線維性組織球腫の1例

橋本久美子* 谷田 泰男* 加藤 泰三*

Summary

74歳，女性の頭部に生じた悪性線維性組織球腫の1例を報告した。初診時の臨床像からは，atypical fibroxanthoma を考えたが病理組織学的に悪性像は全く認められず fibrous histiocytoma と診断した。しかし，腫瘍摘出術後7ヵ月で腫瘍が再発し，後頭部にも腫瘍が新生してきた。その組織像は典型的な悪性線維性組織球腫の像に一致するものであった。全身検索では特に異常はなく，腫瘍広範囲切除術を行い，現在経過観察中である。

緒 言

Malignant fibrous histiocytoma (MFH) は線維芽細胞様細胞と組織球様細胞とを種々の割合で有する未分化で多形型の肉腫であり，高齢者では最も頻度の高い肉腫である¹⁾。本邦でもこの疾患概念が提唱されてから，報告例が増えている²⁾。今回，最初良性の組織像を示した後頭部腫瘍が，全摘7ヵ月後の再発時にMFHの像を呈した症例を経験したので報告する。

症 例

患 者：74歳，女性

初 診：昭和63年1月21日

主 訴：頭部の皮疹

家族歴：特別なことはない。

既往歴：20年来，気管支拡張症で治療中であ

る。

現病歴：初診の約2年前に後頭部に2mm大の赤色丘疹が出現した。自覚症状がないため放置していたところ，徐々に拡大し，出血を伴うようになってきたため，当科を受診した。

現症および経過：後頭部に20×18×10mm，ドーム状に隆起した暗赤色結節があり(図1)，硬さは弾性軟で易出血性であった。臨床的にatypical fibroxanthomaなどの軟部組織腫瘍を考え，生検も兼ねて腫瘍を全摘した。この時点で病理組織学的にfibrous histiocytomaと診断した。

腫瘍摘出後，7ヵ月で同部に腫瘍が再発し，さらに項頸部にも腫瘍が新生した。後頭部のものは，大きさが，15×13mm不整形に隆起した光沢ある赤色結節で(図2A)ある。一方，項頸部の腫瘍は，大きさ17×17mm，表皮との連続性のない弾性硬の皮下結節であった(図2B)。病理組織学的所見より悪性線維性組織球腫と診断し，悪性腫瘍広範囲切除術を行った。後頭部腫瘍は手術瘢痕部より5cm離し骨膜上で剝離し分層植皮をし，項頸部の皮下結節に対しては手

* Kumiko HASHIMOTO, Yasuo TANITA, Taizo KATO: 東北大学皮膚科学教室

図 1. 後頭部の初発疹（手術時）

A. 後頭部の赤色結節

B. 項頸部の皮下結節

図 2. 再発疹

図 3. 初発疹の組織像
(HE 染色×25)

術瘢痕部より 3 cm 離し筋膜上で剥離し全層植皮術を行った。

検査所見：末梢血一般，生化学，血清学的検査では特に異常を認めない。胸部 X 線写真では両下肺野に蜂窩陰影と気管支拡張像が見られたが腫瘍陰影は認めなかった。全身の Ga シンチ

図 4. 再発疹の組織像，後頭部
腫瘍細胞に富む部分（A）と腫瘍間質が粘液腫状を呈する部分（B）を混じる（HE 染色×50）

では，胸部を除き異常な集積像はなかった。

病理組織学的所見

1) 初診時切除標本（図 3）：表皮に著変なく，真皮上層から下層にかけて比較的境界明瞭な腫瘍塊がある。腫瘍の構成成分は線維芽細胞様細胞と膠原線維で非常に線維成分に富んでおり storiform pattern を呈している。腫瘍細胞の核分裂像，異型性，多形性はほとんど認めない。ビメンチン，lysozyme， α_1 -antichymotrypsin はすべて陰性だった。

2) 再発時切除標本

①頭頂部の腫瘍：表皮は圧排され表皮突起が消失し平坦になっている。腫瘍塊は表皮との連続性がなく真皮中層から皮下脂肪組織へと増殖しており脂肪組織と置き換わっている部分もある。腫瘍細胞は多形性に富み，好酸性の明るい胞体を持ち，核は大小不同，不整形で，核分裂像も多数見られる。細胞成分に富む部分と（図 4 A），腫瘍間質が粘液腫状変化を呈する部分（図 4 B）があり，単核および多核の巨細胞も散見される腫瘍内血管は豊富で血管周囲にヘモジデリン顆粒がみられる。免疫組織学的検索では，腫瘍細胞はビメンチン陽性，lysozyme 陰性， α_1 -antichymotrypsin 陰性であった。

図5. 再発疹の組織像, 項頸部(HE染色×50)

②項頸部の腫瘍：皮下脂肪組織に周囲との境界が比較的明瞭な腫瘍がある。腫瘍細胞は好酸性に染まる顆粒状の胞体と、大小不同の核をもつ大きな細胞で、核分裂像や単核および多核の巨細胞も散見される(図5)。膠原線維の産生は豊富である。腫瘍細胞のみ増殖している部分と腫瘍細胞が膠原線維の間を分け入るように増殖している部分がある。基本的には後頭部の再発腫瘍と同じ組織像である。免疫組織学的検索では腫瘍細胞は、ビメンチン陽性、lysozyme 陰性、 α_1 -antichymotrypsin 陰性であった。

考 案

本症例は腫瘍が後頭部に生じ、臨床所見より

atypical fibroxanthoma を疑ったが、その組織像より fibrous histiocytoma と診断し単純摘出術を行った。成書には、fibrous histiocytoma の組織学的鑑別診断に dermatofibrosarcoma protuberans や MFH などが挙げられている³⁾。しかし、初回の組織は細胞成分に乏しい一様な線維成分の増殖だけで、核の異形成や細胞の分裂像もなく、悪性腫瘍を疑わせる所見はなかった。しかし、その後短期間で再発し、組織像は典型的な MFH であり storiform-pleomorphic type であった。

本症例の特徴は、①初発時、臨床的にも組織学的にも benign であり、MFH が考えられなかったこと、②しかし、すぐに再発し今度は MFH の変化があったことである。benign と思っても MFH の可能性を常に考えておくことを痛感したので報告した。

文 献

- 1) Weiss, S.W. and Enzinger, F.M.: Malignant fibrous histiocytoma. An analysis of 200 cases. *Cancer*, 41: 2250-2266, 1978.
- 2) 北嶋敏之, 浜中宏, 橋井裕子, 他: 悪性線維性組織球腫の一例. *皮紀要*, 84: 87-89, 1989.
- 3) Enzinger, F.M., Weiss, S.W.: *Soft tissue tumors*. The C.V. Mosby Company, 223-233, 1988.